

保育内容C「遊びの文化と伝承」による授業実践の検証

宮本 美和子・佐々木 貴弘・君島 智子

(保育学科)

I. 問題と目的

子どもは遊びを通して学び、保育は「遊びを通しての総合的な指導」¹⁾が行われるようにすることが重視される。保育を担う場は「家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れ、乳幼児なりの世界の豊かさに出会う場」²⁾であり、その乳幼児期の世界を豊かにする場を構成し、園生活を支える保育者は、幼児が主体的に活動し多様な体験ができるように援助していくことが必要である。『幼稚園教育要領解説』には「教師は、活動の理解者、園児との共同作業者、共鳴するものとして、さらには憧れを形成するモデルとしての役割や遊びの援助者としての役割がある」³⁾としている。多様な経験を保証する存在である保育者となるためには、その役割を理解し遊びの場を豊かにしていくための学びが必要である。しかし、社会状況の変化に伴い、学生の遊びの体験が十分なのかが問われている。平成17年の『中央教育審議会答申』の子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性の中で、地域社会の変化が子育ての環境の変化となり、幼稚園等施設の教員等にも新たな課題が生じていることを指摘し、その今日的課題の中に「自らの多様な体験を取り入れながら具体的に保育を構想し、実践することができない者がいる」⁴⁾との指摘がされている。子どもの発達はさまざまな保育の営みに影響されるが、保育者自身の経験がその営みに関わってくる。遊びの環境を工夫し、その構成や準備をしていく保育者となる学生自身が、遊びの体験を十分に味

わうことが必要となるのではないだろうか。さらに子どもに受け渡していくものは何か、遊びの文化や豊かさを学生自身が体験しながら、学ぶことが大切だと考える。受講した学生は平成17～18年生まれで、生活様式や遊びが変容している中を過ごしてきている。そこで、学生自身が子どもの遊び文化を体験し、遊びの豊かさ・楽しさやその伝承を担っていく重要性を認識することは大切だと思われる。小島(2017)は、児童文化伝承の保育者養成校の役割と課題の検討に於いて、学生の伝承遊びの認識と経験について調査し、「幼少の頃の伝承遊びを教えてもらった場所は、幼稚園や保育園が多い」⁵⁾とその結果を報告している。これらのことを考えた時、保育者養成の段階での遊びの体験は意義があることと捉えられる。保育内容Cの授業では、子どもの感性を培う上で重要と思われる日本の遊びの文化と伝承について、体験を通して学ぶことをねらいとして実践している。具体的には、素話やわらべうた、独楽回しなどを実践的に学ぶ機会を用いるとともに、子どもたちへ伝えることまでも想定し、伝承やその伝え合いの意味を学ぶことを意識した。加えて、それらを取り巻く環境等の5領域を理論的・実践的な面から総合的に理解を深めることを視野入れた授業実践を行っている⁶⁾。今回は今後の授業実践への示唆を得たいと考え、その授業内容を検証することを目的とする。

II. 方法

1. 対象

短期大学の保育学科令和6年度「保育内容C」の履修者24名（女子22名、男子2名）

2. 調査時期

2024年9月X日～2025年1月X日の授業日

3. 手続き

15回の授業は実践的な内容で構成したが、今回は特に素話、わらべうた、伝統的な料理の体験を取り上げて検証する。授業後にGoogleフォームにて体験後の感想とこれまでの経験の記入を求めた。

10月9日（火）素話

10月22日（火）わらべうた

1月21日（火）伝承遊びと伝統食

4. 倫理的配慮

聖和学園短期大学の倫理規定に基づき、個人情報等には十分に配慮の上、個人が特定されないよう取り扱った。また、本研究における同意を確認し、対象者より了承を得た。

III. 結果と考察

1. 素話による実践

「素話」とは、絵本や紙芝居など視覚にうったえかける道具を使用せず、声による表現だけで語ることであるが、映像による情報伝達が主流になった現代社会において、目の前にいる人物の語りに静かに耳を傾け、想像力を膨らませることは、大切な経験である。何よりも民話は聞いた人の心を和ませ、その中身には、現代に通じる人間の生き方が示されている。浅井ら（2019）は「素話には様々な物語があるため、物語をイメージしやすいものもあればそうではないものもある」⁷⁾と指摘されている。そこで、本授業では、40年間、民話の語り部をされている講師から実際に素話を聴くこと、また講師が準備してくださった民話のうち、1話を人前で披露する実践の場を用い、学生たちの学びを分析する。

図1は、講師素話を聴いたことによる具体的な学びの内容であるが、講師の素話を聴く中で、学生たちは話の内容に引き込まれていったことが感じられる。また、素話を聴く中で集中力が高まり、自然と情景までも浮かんできたことや、幼い頃の記憶が蘇ってきた学生

図1. 講師の素話を聴いたことによる学び

カテゴリー	具体的な内容
話し方や表現	<ul style="list-style-type: none">・言葉だけでここまで豊かな世界を描き出せるのかと感心した・素話を聞いている間、自然と自分の集中力が高まり話に引き込まれた・声のトーンや間の使い方、表現の工夫によって、頭の中で鮮やかな映像が浮かび上がってくるのは新鮮な体験だった・絵などの視覚的な情報がなくても自然と話の情景が浮かんだり集中して聞き入ることができた
イメージの広まり	<ul style="list-style-type: none">・話を聞く中でイメージができたので話に引き込まれた・絵本のように絵があるわけではないので、次はどんなことが起きるのだろうというワクワク感があった・幼い頃に祖母に読み聞かせをしてもらった思い出がよみがえり懐かしいような温かい気持ちになった・話を聞きながら自分のイメージを広げて自分なりの世界を作ることが出来るところが素話の良いところなのだった。特に幼児期では自分で想像して楽しむという素敵な育ちがあると感じた・話を聞きながら自分のイメージを広げて自分なりの世界を作ることが出来るところが素話の良いところなのだった

図2. 素話の実践からの学び

具体的内容
<ul style="list-style-type: none"> ・実際にグループやみんなの前で実演してみても、緊張のあまり言葉がうまく出なかったりわかりやすく表現することができなかつたりしたので素話の難しさと感じた ・実際にしてみるととても緊張して話を飛ばしてしまいそうになったため、しっかり、物語を一通りイメージできるぐらい、何度も、物語を読むことが大切だと学んだ ・素話はただ語るだけではなく、聞いている人がイメージを持てるよう話のトーンやスピード等にも気を付ける必要があると感じた ・自分が体験してみても人に伝えることの楽しさを感じた ・覚えるの大変など思いましたが、話のストーリーをつかめば、あとは自分なりの言葉で話していけば良いので意外とできた

もいたことが明らかとなり、素話を聴いた学生たちがさまざまな学びを得たことが感じられる。

図2は、素話の実践からの具体的な学びの内容であるが、素話の実践を通して、人前で話をすると緊張のあまり言葉が上手く出てこなくなったと感じた学生がいたことが明らかになった。一方で、人前で経験したからこそ、ただ語るだけではなく、聴いてもらう側にもどのようにしたら伝わりやすくなるのか、試行錯誤した経験が明らかになった。さらには、人前での語りを経験し、素話の楽しさを感じたり、話のストーリーをしっかり確認したりすることで、自分の言葉表現することができ、思ったよりも実践が上手くできたという声もあり、学生一人ひとりが素話の実践を通し、難しさと同時にその手ごたえも感じたことが明らかになった。

2. わらべうたによる実践

わらべうたは、昔から子どもたちの間で歌い継がれてきた遊び歌のことで、心地よいリズムと言葉が特徴であり、聴く・話すといった言語の土台作りや親子の触れ合いにも役立つものである。このようなわらべうたは、保育現場でも様々な実践がなされているが、その効果効用についての研究も広がっている。坂本は、「わらべうたは発達段階に応じた多

様な遊び方により、様々な発達への刺激となり、子どもたちの育ちに寄り添う活動であるといえる。また、それらを保育に取り入れることは、保育者の専門的技能の向上とわらべうたという文化財の伝承だけでなく、保育の第一歩である子どもの姿を捉える多面的な視点を持つことができる活動であり、その輪を家庭に広げる可能性を持っている」とその可能性を記している⁸⁾。発達への刺激という点では、表現の要素だけではなく、人間関係の育ちが関わっていると考え、人間関係の育ちとわらべうたとの関係を感じとれるように、子どもたちの人間関係の育ちを考えられるように行った。1回目は子どもと信頼関係を結ぶわらべうた、2回目はうたや動作で仲間とつながるわらべうたを中心に行い、3回目は繰り返して遊び、体験を重ねることをねらいとして実施した。特に遊びの中での鬼と子の役割交代のある遊びを行い、役割の交代の難しさや鬼になった時の気持ち、鬼の役割を交代できた時のほっとする気持ちを伝え、他者の思いに気付くことになることも伝えた。

わらべうたについては、保育内容C受講学生(n24)のうち、有効回答が23名であり、そのうち21名(91.3%)がその経験があると回答しているが、その経験した場所として最も多いのは短大・大学であり17名(81%)、次いで、保育所・幼稚園が9名(42.9%)、小

学校が6名(28.6%)である。わらべうたは、保育所や幼稚園、小学校でも経験している学生たちもいる半面、短大入学後に、はじめて経験した学生も半数程度いることが明らかになった。

また、これまでに経験したことのあるわらべうたとしては、「かごめかごめ」が最も多く5名であり、「ずいずいずっころばし」が3名、「なべなべそこぬけ」が2名、「いろはにこんぺいとう」が2名という結果であった。

わらべうたを通して子どもが経験することについて(複数回答可)、学生たちは、友達との触れ合いと回答している学生が20名(87%)、うたやリズムの楽しさと回答している学生が14名(60.9%)である。このことから6割以上の学生が、わらべうたの経験により、子ども達が「うたやリズムの楽しさ」「友達との触れ合い」を経験することができると感じていることが分かる。

次に、わらべうたの授業を通して、今後の

保育にわらべうたを取り入れたいと思うかについては、表1のとおり、18名(78.3%)が取り入れようと思うと回答している。保育実践に取り入れたいと思う理由は、図3のとおり、わらべうたにより、子ども達が触れ合いを通して仲良くなれるきっかけになると感じている、このような触れ合いにより、絆や信頼関係が生まれたり、取り入れたことによる効果が高いと感じている学生がいることが明らかになった。一方で、わらべうたを取り入れたいかと思うかについて、4名(17.4%)がよく分からない、1名(4.3%)が思わないと回答している。その回答の理由として、わらべうたは言葉やリズムが難しいため、取り入れる自信がないや、覚える自信がない、実習先でわらべうたをやっていないからといった内容であり、わらべうた自体を否定しているわけではないが、これまでに、自分自身で取り入れた経験がなく、取り入れることが難しいと思っている学生がいる実態も明らかに

表1 わらべうたを通しての経験(複数回答可)

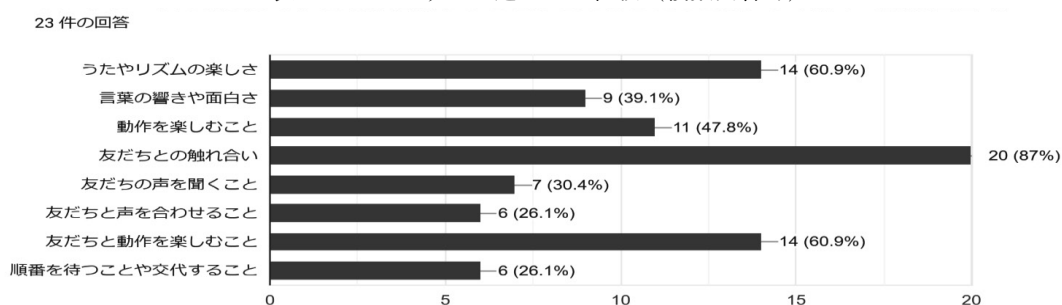


図3. 保育実践に取り入れたいと思う理由

具体的内容
・全員で同じことをする意識と、友達や先生との触れ合いにもなって、絆や信頼関係が生まれると思うから
・子どもたちとの触れ合いを通して親しくなるきっかけになる。仲を深めることができるから
・小さい頃に少しでも経験しておくくと大人になってから不意に楽しめるから
・友達と一緒に触れ合いながら楽しめるものが多かったので保育に取り入れたいと思った
・子どもとコミュニケーションを取れると思ったから
・わらべうたの時間がある園に就職するから

なった。今後の教育活動の中でも、わらべうたの実践場面を用い、少しでも学生に自信を与える必要がある。

3. 伝承遊びについて

伝承遊びとは、古くから子どもたちの間で生まれ、大人から子ども、子ども同士において、口伝えや遊びの体験を通じて受け継がれてきた遊びである。伝承遊びには、あやとり、おはじき、お手玉、カルタ、けん玉、独楽、たこあげ、めんこなどがあり、現在の保育現場でも数多く取り入れられている。保育者が伝承遊びを取り入れる理由について、松垣(2016)は「保育の中に伝承遊びを取り入れる必要性を感じており、伝承遊びが幼児期の子どもの成長や発達に有効であると考え、また伝承遊びを通して日本文化を知ってほしい、継承してほしいという願いをもって保育に取り入れている」⁹⁾ ということを現職保育者へのアンケート調査により、明らかにしている。

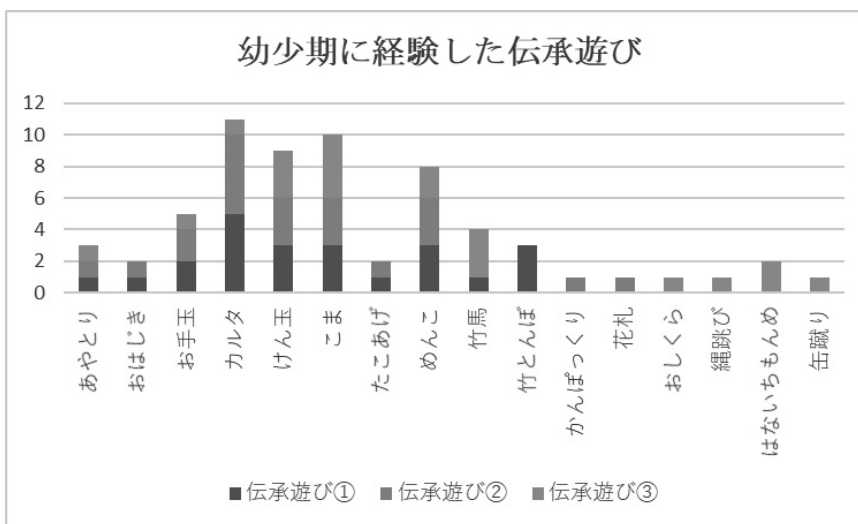
下記は、本学学生の幼少期に経験した伝承

遊びについてのアンケート調査（伝承遊びを3つ挙げる）であるが、その合計として、カルタが最も多く、こま、けん玉、めんこ続いている。そこで、本授業においては、講師をお呼びし、体験的な独楽回しの学びの場を提供した。学生たちは、独楽回しを授業外でも実践するなどその難しさと面白さを同時に感じることができ、この伝承遊びを保育者としても実践したいとアンケートにも記している。このような伝承遊びを今後も継承していくためには、学生が自ら実践できる環境を整えていくことが肝要であると感じる。

4. 伝統料理

伝統食とは、「主にその地域で生産される農林水産物を用いて加工・調理された食物で、その地域の風土や習慣に合わせて長い年月をかけて形作られたものとし、多少現代風にアレンジされたものを含む」¹⁰⁾ ものとある。長い歴史の中で、単なる料理としてではなく文化として育ててきたものが、伝統的な食文化、すなわち「伝統食」と言われている¹¹⁾。授

表2 幼少期に経験した遊び



業では「伝統食」について話をした後、各自が伝統食について事前課題に取り組んだ。「伝統食」と聞いてすぐにはイメージできず戸惑う学生がいて、日常生活で特に意識することがないのではないかと思われた。そこで、自分の出身地や関心のある地域を調べるように伝え、詳細を調べる際には地域を限定せず、興味を持った伝統食を調べることとした。しかし、提出した18名中16名(88.9%)が出身地域の伝統食を調べ、発表した。発表を聞いて、知っていた食べ物が伝統食であったことに気付く学生や初めて聞く料理に興味を示し、自ら調べる学生もいた。その後、調理してみたいものを話し合い、ずんだ団子と芋の子汁を調理することとした。初めて団子を作った、作り方を知ったという学生、すり鉢やすりこぎを初めて使う学生がいて、調理方法はもちろん、道具の使い方も学ぶこととなった。昔からあることを体験できてよかった、知らなかった伝統食を知ることができて

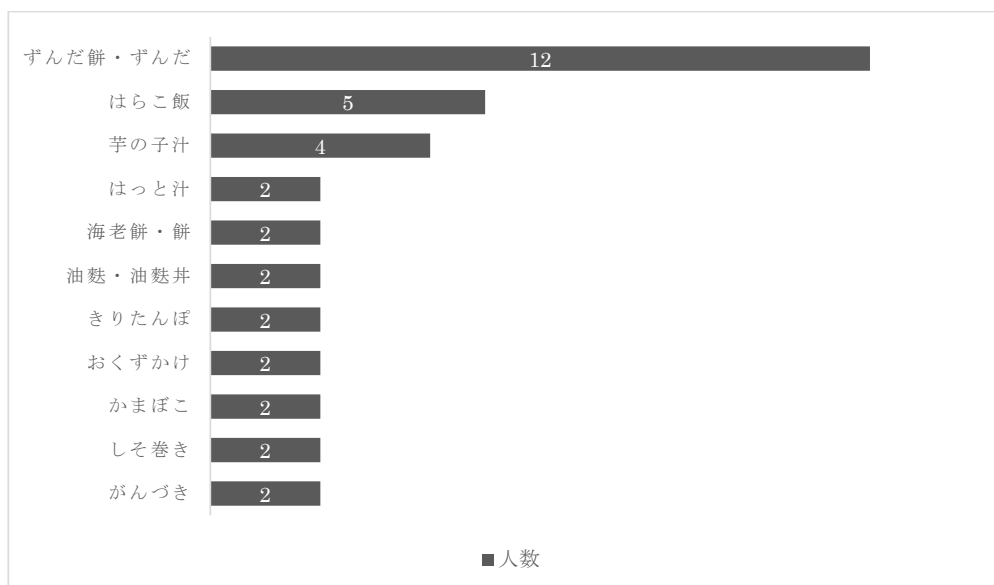
よかった、みんなと調理して楽しかったと感想を記入していた。

食べたことがある伝統食のうち、2名以上の記入があったものの人数を表に示す。他に、いかにんじん、雑煮、白石温麺、柏餅、納豆汁、せんべい汁、沖縄そば、豚丼、塩釜サラダ、甘露煮の記入があった。記入した伝統食をどこで食べたかという問いには、実家、祖父母宅、小学校の給食、旅行先の順だった。一部であるが、家庭の味として学校の給食も伝承の役割を果たしていることが窺えた。今回の調理もその役割を果たしたのではないかと考える。

IV. 総合考察

本稿では、2年後期の選択必修の授業である保育内容C受講者の学びの体験を分析し、今後の授業実践に活かすことを目的としたが、本研究では、以下の内容が明らかになった。

表3 食べたことがある伝統食



結果として、素話の実践では、物語を聴く体験からは話の世界に引き込まれたことやイメージしながら話を聞くことで、学生たちは言葉で表現する世界の豊かさに気付いていた。また、自らが素話の体験する中で、実践する難しさを感じたり、その面白さを感じたりしていた。

わらべうたの実践では、人の絆や信頼関係が生まれるなど、取り入れたことによる効果が高いと感じている学生もいた。一方で、実践したいと思うが、そのためには、保育者の経験や技量も必要になり、経験したいと思う一方、実践は難しいと感じる学生もいることが明らかになった。

独楽回しの実践では、改めて独楽回しの楽しさを感じ、授業外でもその実践を行い、独楽回しなどの伝承遊びを今後の保育実践にも活かしていきたいと感じる学生が多くいることが明らかになった。

伝統食の実践では、地域の伝統食を調べたことで、地域への関心が高まった学生がいた。また、調理実習をしたことにより、これまであまり経験したことがなかったが、地域の文化を身近に感じる経験になった。さらに、ただ調べるだけでなく実際に調理する体験するなかで、その楽しさを知ることが出来たと感じている。

授業最終回に行った学生の学びに関するアンケートでは、伝統遊びやわらべうたなどは、保育に繋がりたいと回答している学生がいたり、伝承遊びや伝統料理など伝承文化に触れることの大切さを学んだと回答している学生がいた。また、伝承遊びにも様々な意味があることを体験することができ、自分が保育者となった際に子どもたちに伝えていきたいと感じていた。

本授業の受講生は、自らが授業のなかで経験したことを今後の保育の中で実践してい

たいと感じている。草薙ら（2015）は、学生の伝承遊び経験を調査し、遊びの経験の傾向にはばらつきがあるが、「（中略）子どもの伝承遊びの経験には環境整備が少なからず影響している」¹²⁾と記している。本授業のなかで、実践した素話、伝承遊び、伝統食などの授業実践では、授業のなかで、はじめて体験した学生も半数近くいたが、授業での体験を通し伝承遊びや、伝統食など歴史を感じられるものが多く初めて知るものや保育に生かせるものが多くあったと感じており、今回のような実践的な授業を今後も行い、実践体験から自ら学べる環境を提供していきたいと考える。伝承遊びや伝統料理など伝承文化に触れることは、人との交流の機会を持つことにつながる。今後も継続的に授業実践の検証を行うことにより、授業の質向上に努めたいと考える。

V. 参考文献

- 1) 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説 P20
- 2) 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 P20
- 3) 前掲1) P116-117
- 4) 文部科学省 中央教育審議会答申 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性 第4節子どもの育ちの環境の変化の社会的背景 平成17年1月
- 5) 小島千恵子（2017）児童文化の伝承 -保育者養成校の役割と課題- 名古屋短期大学研究紀要 第55号 P59
- 6) 令和5年度保育内容C（遊びと文化の伝承）授業実践報告：身近な素材を使った遊びの工夫」を通し学習成果に関する調査 宮本美和子・中島恵・山本信 聖和学園短期大学紀要 第62号 実践発表
- 7) 浅井拓久也、森下嘉昭（2019）「養成校学生にとっての素話の魅力と課題に関する研究 -紙芝居との比較分析を通じて-」山口芸術短期大学研究紀要 第51巻、pp.123-131.
- 8) 坂本久美子（2024）「保育におけるわらべうたあ

そびの有用性」山口学芸研究 第15号 2024年、
pp.27-39.

- 9) 桧垣淳子 (2016) 「保育現場における伝承遊び－
保育者の視点より－」中村学園大学・中村学園
大学短期大学部 研究紀要 第48号、pp.43-50.
- 10) 農林水産省 伝統食を含む食文化の継承および
地域産物の活用への取り組み状況の概要
[https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sigen_
kankyo/dentou_syoku/gaiyou/index.html](https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sigen_kankyo/dentou_syoku/gaiyou/index.html)
(2025.11.25)
- 11) 農林水産省 日本人の伝統的な食文化
[https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/
culture/pdf/guide_all.pdf](https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/culture/pdf/guide_all.pdf) (2025.11.25)
- 12) 草薙恵美子・藤本愉・黒坂陽一・松田由里子
伝承遊びの意義と実践 國學院大學北海道短期
大学部紀要 第32巻 P23-25